

きょうだいが人生の主人公として 生きる土台を育むために

北海道教育大学 戸田竜也

■「きょうだい児」として過ごした頃

約20年前から、本誌『みんなのねがい』にたびたび脳性麻痺の妹をもつきょうだいとして手記を執筆してきた筆者は、いつの間にか40歳を過ぎたオジサンになりました。

いわゆる「きょうだい児」として過ごした子どもの頃は、はるかに前のことですが、そのときに筆者が経験したことや考えてきたことは、今日の「きょうだい児」や青年期にあるきょうだいたちにとどのように理解されるのでしょうか。このような興味から、筆者のきょうだいとしての経験を青年期のきょうだいたちに聞いてもらおうとにしました。

筆者のエピソードを聞いた青年たちからは、「私も障害のあるきょうだいのことを隠したいと思ったことがある」とか、「親の役に立ちたいと思って無理をしていた」「親しい友人が障害のある人のことをけなしていることがつらかった」など、共通する経験・感情があったことを話してくれました。また、必ずしも同じ経験をしたわけではないものの、きょうだいとして「わかる気がする」と言ってくれる青年もいました。

■きょうだいのことを知りたい

筆者の語りの場合は、青年期にあるきょうだいたちのエピソードを聞く対話へと発展していきました。

教員養成大学で特別支援教育を専攻した男性は、専攻を選んだきっかけに「障害のあるきょうだいの存在があった」と語ってくれました。「弟のことをもっと詳しく



小学生の頃、親友に「おまえの妹はお化けみたいだな」と言われた前後から妹がいることを隠すようになったこと。妹の歩行訓練や通園施設への送迎などで忙しうにしている親の姿を見て、家事などの役割を積極的に担ってきたこと。妹が自分と同じ学校に就学することが嫌で、地域から離れた特別支援学校に入学したときにはほっとしたこと。家族や親類の期待に応えて「しっかり者のお兄ちゃん」でいようと一生懸命だったこと。それは、いつの間にかそうしないと「親に愛されない」「家に自分の居場所がなくなる」と追い詰められるように感じていたこと。中学・高校時代になると、恋愛のパートナーに妹のことを伝えるのを躊躇した一方、小学校時代とは反対に障害のある子どもも地域の学校で学ぶべきと考えるようになって「統合教育」を学ぼうとしたこと……。

知りたい」という思いだったのです。

3歳離れた弟とは、幼いころは一緒に遊ぶことが多かったものの、それが「つかれる」と感じることもありました。特に、自分の友人を交えて複数で遊ぶときには、弟が突拍子もない行動をしたり、自分の友だちが嫌な思いをするようなきつい言葉を発したりするので、常に「弟がなにを言うか、なにをするか緊張していた」と言います。また、独特のこだわりやたびたびある痾癪かんじょうに「自分とは性格が全然ちがう」と感じていました。いつの間にかきょうだいゲンカが増え、最近ほとんど会話がなく、「仲が悪い」状態だといいます。

青年が高校に入学した年の4月、弟は中学校の特別支援学級在籍となりました。このときはじめて、親から弟が発達障害であることを聞かされました。すでに小学校低学年のころには診断を受けていたものの、弟を「ふつうの子ども」として育てたいという親のねがいから、障害のことを「話さなかった」と説明されました。

青年は、もっと早くに弟が発達障害であるということを知っていたら、「弟にとってよいかかわりができたのではないか」と語ります。あそんでいたときもやさしくできたのではないか。そして、いまのように仲が悪くならず済んだのではないかと考えるのです。

■きょうだい支援のついでみ

5歳離れた知的障害の妹がいる青年は、「きょうだい支援にとりくみたい」という思いを語ってくれました。インターネット上のSNSを介して、きょうだい支援のとりくみが広がっていることを知ったのがきっかけだと言います。